

コウノトリ 首都圏の空へ

千葉県野田市のチャレンジ



国の特別天然記念物で、兵庫の県鳥でもあるコウノトリ。河川改修や水田での農業多用などの影響で一度は国内で全滅したものの、最後の生息地となった豊岡市で約40年の歳月を費やして人工繁殖、自然放鳥に成功。野生復帰事業が進んでいる。この世界でも例のない取り組みに今、首都圏の自治体が乗り出した。千葉県最北端のまち野田市。多摩動物公園（東京都日野市）から譲り受けたつがいから今年6月、2羽のひなが誕生、順調に育っている。飼育施設のスタッフには、学生時代から豊岡市でコウノトリの生態を研究し続けてきたという飼育員も。「大空を羽ばたく姿をいつの日か…」。兵庫県立コウノトリの郷公園をはじめ、「先進地」豊岡市などに飼育や生育環境整備のノウハウを学びながら、「コウノトリ舞う里」実現へと夢を膨らませている。

（神戸新聞社東京支社編集部長 志賀 俊彦）

自然再生のシンボルに

関東平野のほぼ中央に位置する野田市は、東側を利根川、西側を江戸川、さらに南側は両川を結ぶ人工の利根運河と三方を河川に囲まれている。利根川の対岸が茨城県、江戸川の対岸は埼玉県という県境のまちだ。日本最大の醤油の生産地として知られる一方、東京から30km圏ということもあって、高度成長期以降、ベッドタウンとして宅地開発が進められてきた。湿地は埋め立てられ、数多くの森林が伐採されるなど、豊かな自然が失われていったという。

自然環境の保全が叫ばれる中、バブル崩壊という形で開発に一応の歯止めはかかったが、残された環境をどう守り、多様な生物が生息できるような失われた自然をどう再生するかが課題に。そのシンボルとして市が掲げたのが、コウノトリの野生



野田市は東京から30km圏内。南部の江川地区には貴重な動植物が生息している



兵庫県立コウノトリの郷公園から贈られたはく製

復帰だった。

「もともと江戸時代には関東平野にも数多く生息していた。コウノトリが広範囲にわたって自由に飛び回れるよう、水辺や餌場となる環境を整えることが、自然の再生につながる」。野生復帰の目的を同市の徳富公明建設局長はそう語る。

同市を含む関東の30自治体で構成する「コウノトリ・トキが舞う関東自治体フォーラム」も飼育拠点づくりを進めていく方針だ。

ひな2羽 すくすくと

「もうこんなに大きいんだ」「今にも空へ飛び立っていきそう」

フェンスとネットに囲まれた専用ケージ（幅16.5m、奥行き30m、高さ3〜4m）内の巣の上で、2羽のひなが羽を広げたり、羽繕いをしたりしている。誕生から約2カ月が経った8月上旬。すっかり成長した姿に、ガラスを隔てた観察スペースから見つめる見学者たちの表情にも笑みが浮かぶ。

野田市南部の江川地区。里山や湿地などのかな田園風景の中に建つ飼育施設「こうのどりの里」では現在、2羽のひなと親鳥の計4羽が飼育されている。

親鳥は8歳の雄と18歳の雌のペア。繁殖のため昨年12月、コウノトリの飼育で経験と実績のある多摩動物公園から譲り受けた。

ペアは繁殖シーズンを迎えた今年4月になると、ケージ内の枝などを集め、巣作りを始めた。予め観察スペース寄りとケージ奥の2カ所に高さ1メートルほどの円形の巣台を用意していたが、ペアが産卵子育ての場所として選んだのは、中央付近にある止まり木。巣台に比べると、安定性はもう一つだが、5月上旬に産卵が確認され、約1カ月後、相次いで3羽がふ化した。

ひなのうち1羽は死んだが、雄雌各1羽はすくすくと育ち、8月上旬には、巣から地上へと降りる「巣立ち」を迎えた。



今年6月、相次いで誕生したひな。2羽が元気に育った（野田市提供）

豊岡でのフィールドワーク 飼育に生かす

飼育は、野田市が第3セクター「野田自然共生ファーム」に委託。飼育員と飼育補助員の2人1組、3チームのローテーションで、餌やりや行動観察、健康チェック、餌場をはじめケージ内の清掃などを行う。コウノトリを施設に迎えるに当たって、飼育員らは、多摩動物公園でみっちり研修を積んだという。

ほかに「多い日は1日50〜60人に上る」（同ファーム）という見学者への対応も、コウノトリや野生化事業を理解してもらう上で、大事な業務だ。

餌は、アジやワカサギの一種、スメルト、それに生きたドジョウ。朝と夕、水を張った餌場に置く。「1日に与える餌の量は、普通1羽500g



施設では、ガラス越しにコウノトリ親子を見ることができる

前後。でもここでは1羽当たり600〜700gは食べている。食欲旺盛です」。そう笑うのは飼育員の武田広子さんだ。

東京出身で、大学、大学院を通じコウノトリの生態などを研究。大学在学中の2004年からは毎年、豊岡の民家に数カ月間滞在しながら、中国大陸から飛来したとされた野生や、郷公園から放鳥された個体を追跡、採餌行動などを観察してきた。

昨年春、「コウノトリに関わる仕事に就きたい。滅多にない機会」と飼育員に採用された。ところが、初めて経験する飼育に「どうすれば繁殖に成功するのか」戸惑いの連続だったという。

日々の世話でも「餌場の水をきれいにしておかないと、餌の魚の油がコウノトリの鼻に詰まるとか、ケージを高くすると、中を飛び回ってネットにぶつかる危険がある、など研修を通じて初めて



「健康状態はどうか」。武田さん（右）ら飼育スタッフは交代でコウノトリの様子をチェックする

■野田市におけるコウノトリ飼育の歩み

- | | | | |
|----------|---|------------|---|
| 2011年 | コウノトリの生息域外保全に関する勉強会を設置。実施計画、飼育に関する基本方針案を策定 | 2012年 11月 | 江川地区にコウノトリ飼育施設の整備文化庁長官による文化財保護法に基づく現状変更の許可
環境大臣による種の保存法に基づく希少野生動物譲り受けの許可 |
| 12月 | 生息域外保全・野生復帰に関する有識者会議を設置。基本方針案について専門家から意見を聴く | 12月4日 | 多摩動物公園からつがいを譲り受け飼育開始 |
| 2012年 8月 | 野田市と東京動物園協会の間でコウノトリ保全に関する協定を締結 | 2013年 5月8日 | 産卵確認 |
| | | 6月9〜12日 | 3羽が相次いでふ化。その後、1羽は死ぬ |



成長したひな。餌（アジ）も上手に食べられるようになった

「豊岡では、当初の保護活動から約半世紀かけて放鳥がかなった。ただ、それがゴールではない。環境は何代もかかってつくりあげるもの。100年後、200年後を見据えた地域づくりに地道に取り組む姿勢が必要」とアドバイスする。

先進地からエール

県立コウノトリの郷公園では、昨年からは野田市の飼育員らの研修を受け入れ始めた。ほかにも放鳥式典やシンポジウムに関係者を招待するなど交流を深める。

「気づかされることばかり」。それだけにひなが誕生、巣の中で動く姿を目にしたときは感激した、という。

将来的に自然放鳥を実現させたいが、「野生に放した後のことを見据え、飛翔、採餌の能力をしっかりと見極めないと。豊岡での経験を生かされば」と話す。



自然の中をコウノトリが自由に飛び回る。豊岡がお手本だ＝豊岡市内

住本典彦副園長は「少ない飼育羽数から放鳥につなげる。野田流“が確立されれば、後に続く町のモデルになるはず”と野田市の取り組みを評価。「大きなビジョンを共有し、協力し合っていきたい。参考になる技術や情報は惜しまず提供する」と呼び掛ける。

■コウノトリ飼育施設「こうのとりの里」

公開 火～日曜日の午後1時～3時（10月1日現在）

休館 月曜日（月曜日が祝日の場合は翌日）、
年末年始（12月29日～1月3日）

行き方 ①東武野田線梅郷駅より

- ・茨城交通バスで「野田梅郷住宅」下車徒歩10分
- ・まめバス南ルートで「しらさぎ通り入口」下車徒歩7分

②つくばエクスプレス柏たなか駅より

- ・東武バスイーストで「梅郷8号公園」下車 徒歩12分

問い合わせ

野田市三ツ堀369 ☎ 04-7197-1741

■コウノトリ

学名キコニア・ボイキアナ。

極東を中心に生息。成鳥は全長110～115cm。翼は160～200cm前後。

体重は約4～5kg。一般にオスはメスより大きい。肉食性で、餌はドジョウ、フナといった魚類のほか、カエルやバッタなど。

